

小松文芸賞

【自由作品】

今一重

（梅林院能順と今江町）

金戸紀美子

木場潟に発する前川は、排水機場の水門をくぐり、今江潟大排水路（前川）として梯川に合流している。水門の上に立つと、鴨を遊ばせ滔々と流れる川は、岸に咲きほこる桜を水面に映し遠くまで続いている。

が、此処に立つ私にはいつも葦の生い茂る今江潟が浮かんでくるのである。遊行上人一行の舟、米俵を積んだ舟や旅人の舟が彼方に浮かぶ。それらに混じり、京よりの客人を乗せた梅林院能順の舟も近づいてくる。加賀三代藩主前田利常が小松城に隠居し

て、梯川沿いに天満宮を建てた時、当時京都連歌の第一人者の北畠能順を初代別当に迎えた。能順は御幸塚（三湖台）の東方の眺めの良い丘に来てよく連歌の会を開いていた。その頃この丘は松の木が生い茂り、すぐ手前の木場潟を隔て、間近に霊峰白山を眺め得る景勝の地であったそうで、村人は親しみをこめて連歌山と呼び伝えて来た。だが昭和の初め、丘の西半分が墓地となり、その後東側も国鉄と国道のため丘が削られ、昔の面影は全く無くなってしまうている。

曲がりくねっていた梯川は真つ直ぐ安宅へ注ぐようになった。石田橋あたりから南下して今江潟に注いでいた川は、古河町の名に昔を留めているのみである。

太古より梯川を下り今江潟へ、それから柴山潟を経て片山津・大聖寺へ、又前川を抜けて粟津へと、三湖は大切な交通路であった。

天満宮より梯川を下り今江潟へ、そして今江潟に注いでいる前川を遡ること暫く、旧国道近くに神主河道があった。神主河道は公に定められていたらしく、米出河道・

上人河道と共に江戸時代の地図に確と記されている。

一方、中国の「赤壁の賦」に似せて加賀三湖巡りの漢詩もあるように、潟は詩人にとって宝庫だった。さやさやと葦辺を洗う水の煌めき、身近によぎる魚や鳥。古き詩人等の舟の団居が思い起こされる。

神主河道をあがると近くの願勝寺脇の那谷道に通じる。利常は一向一揆で荒廃していた那谷寺の修復をしているが、木材を運んだり参詣のために、幅八間の道を作り、両側に杉を植えたと伝わっている。那谷道は御幸塚と連歌山の間を通り、木場潟沿いに粟津を経て那谷まで続く。

猶、今江には神主町という言葉が残っている。神主河道の脇にあり、能順達をもてなす役目があったのだらう。神主町で寛いだ能順一行のもてなしは、きつと舟を飛び越えていたボラの刺身とザッコの甘露煮、御飯にはシジミ汁、夏には大きな西瓜など畑のものと思い巡らすのも楽しい。

今一重 雪もかすみの 白根哉
これは碑に刻まれている能順の句である。

白山を詠んだ句で現存するものはこの一句のみという。白根は白嶺^{しらね}のこと。

「雪をいただいている白山は茫と霞んでいるが、この風情も良いものだ。だが薄絹のような霞よ。今一重霽れてくれないかなあ」

と茫々と霞む白山への語りかけと私は理解するのだが、如何だろうか。桜の季節、湯は霞という趣きを添えてくれるのである。人々は雪を被いて青空に映える姿を期待するので、白山を撮る人達は二月の澄み切った日を選ぶと聞いたのを思い出す。

芭蕉の句碑は市内に沢山あるが能順の句碑は無い、と知った今江町文化協会は、句碑の建立を決めた。時あたかも能順の没後三百年と、町内の墓地整理の時期と相俟って、平成十八年、連歌山（墓地）の頂上に句碑の除幕式を挙げている。郷土の歴史を学んでいた児童達がその幕を引いたのが記憶に新しい。

武を捨て文化の百万石を目指した外様大名の加賀藩は、京都の文芸や美術工芸の技に秀でた多くの人達を招いて産業を発展さ

せ、自らも、加賀は天下の書府といわれるほどに古典の収集をしている。利常在住の十九年間に文化都市小松の礎が築かれていたことを今更のように識らされている。

城主や武士に加え町衆をも巻き込んだ小松の俳諧連歌は、『奥の細道』の途次の芭蕉に、三度目の句座を乞うことが出来るほど、既に土壌が育っていたのである。その後小松の俳諧は、橋北・橋南と互いに栄えたのは周知のとおりである。

水門の上の草に腰をおろし夢見心地の私は一陣の風にはっとした。風向きが変わり花卉を運んでくる。腰を上げるとしよう。

